



大学生協で培ったもの、今後に生かすもの

2000.1.11 岡安喜三郎

1. 印象深かった「預かりもの」意識 大学生協経営の原点

<足利工大生協池浦孝雄理事長『経営感覚と大学生協』(学協運動130号、1982年11月号)>
組合員からの預かりもの / 社会からの預かりもの / 未来からの預かりもの (空間軸と時間軸と)
空間軸は「ステークホルダー論」として新たな展開へ

参考: 「システムとその周界領域」(N. ノーマン)という考え方も
もちろん、「ス・論」は、機能としての経営から存在としての経営への転換を含んでいる
私の中では、これが「ビジョン論」につながっていったのではなかろうか

2. 「大学生協と日本社会との接点とは」と問われて 大学生協の社会的原点

いろいろな体験から、もっとも説得力のある「大学生協の社会的貢献」は:
毎年卒業生が出る。これが大学の特徴、大学生協と社会の接点
協同や協同組合組織形態に確信を持った学生を毎年世に送り出す (時間軸の大切さ)
if 学生を巻き込めない大学生協経営、活動は、もっとも肝心な社会的原点を放棄している
「協同とは」、「協同組合原則とは」のない経営、活動には、原点の「げ」の字もなくなる
「日常の仕事の中」にこそ、大学生協の社会的原点がある、このことを忘れずに!

3. 追求し続けた「生協職員の仕事のやりがい、協同の場での労働と人間関係」

今のチーム制組織は、「過去の清算」か、それとも「未来型組織への挑戦」か
>労働の場における居場所の問題 ~ 1日8時間以上 「労働生活という概念」の成立(^o^)
「居場所」は、人格の尊重、および役割分担から生まれるのではないか
>いずれにしろ役割分担は必要。要は「他律的役割分担」から「自律的役割分担」^{注1}へ
「上から作る組織」(ツリー型)から「横を見据えた組織」(NW型)へ

「課題は他律的な場合も多いが、
原則・原点の維持・発展は、もっぱら自律的問題である」

4. 労働者協同組合形態は、私にとっては自分の信念の延長

私にとっては自分の信念の延長なんです。この考え方が、若い人たちのみならず、高齢者の仕事興しの中でも重要な視点であることが、この間明らかになったに過ぎません。

生協の中で培った信念が、生協の枠を越えてしまうことはよくあることです。これが「21世紀の協同」の中に生きそうなんです。それを開始するには10年後では「遅い」と思ったことです。

5. 21世紀の日本社会に協同組合オプションを実現する

基本的考え方は、「すべての協同組合は生活の中で組み立てられる」という仮説

ex. 「農業協同組合法」 農業生活の向上を協同組合方式で
「生活協同組合法」^{注2} 消費生活の向上を協同組合方式で

すべての生活場面に協同組合オプション (協同組合という選択肢) がある日本社会
生活の中の「働くこと」 (= 労働生活) を包み込んだ協同組合法もあって然るべき

「排除ではなく包み込みの協同組合」(1999年ICAケベック大会)

「協同組合オプション」は日本社会、地域社会を共生・共創の社会にするのに貢献できる
「多様な協同組合の存立」、オール協同組合の協同組合間連帯 (挑戦と寛容)

^{注1} 「雇用労働」から「協同労働」を分ける際の実践的テーマでもある

^{注2} 正式名称は「消費生活協同組合法」。消費だけではない様々な生活を対象にする法律はどの様に?

